

(2) 指定後の調査成果

(i) 史跡 宇佐神宮境内

A 宇佐神宮の歴史

(a) 宇佐神宮の成立

八幡神の成立については、平安時代に原文が記されたとされる宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起や、鎌倉時代末に宇佐宮寺学頭の社僧神吽が編纂した八幡宇佐宮御託宣集(以下、御託宣集)等の古文書に記されており、その解釈については諸説ある。

八幡神の顯現に関する伝承の一つによれば、菱形池のほとり、小椋山の麓に鍛冶翁があり、大神比義が祈ると3歳の童の姿に変わり、「辛国(ハチノカニ)の城に始て八流の幡と天降って吾は日本の神と成れり」という託宣を出したとされる。八幡神が最初に顯現したという御靈水は、小椋山の北東隅に位置する。小椋山全体が常緑広葉樹であるイチイガシを主体とした森であり、神宿る森であったと言える。

御託宣集に記載されている、和銅5(712)年に小椋山のふもとに現れた八幡神は鷹に姿を変え、駿河川のそばに宮柱を立てて祀ったとされる場所が現在の鷹居神社である。靈龜2(716)年に小山田社に移った後、神亀2(725)年に小椋山に社殿(一之御殿)が建てられた。その後、天平5(733)年には一之御殿のとなりに比売神を祀る二之御殿が建てられた。このように、宇佐神宮の祭神は、本来は八幡神と比売神の二座であつたが、弘仁14(823)年に大帝姬(神功皇后)を祀る三之御殿が建ち、現在のように三柱の神を祭神とする形が整った。

(b) 弥勒寺の成立と神仏習合のはじまり

養老4(720)年に大隅国で起こった隼人の乱では、三角池(中津市)の酋から作った枕を御験として輿に乗せて八幡神自ら出陣しており、国家を守護する境界神としての性格も發揮する一方で、八幡神は仏神であり神仏習合を先導する神でもあった。

小椋山に社殿が建てられる同年、八幡神は「弥勒之禪定院建立」を託宣し、宇佐宮の東にある日足の地に弥勒禅院が建てられた。その後、天平10(738)年には、大神比義建立とされる藥師勝恩寺とともに現在の地に移された。このように、宇佐神宮は現在の小椋山に社殿が建てられると同時に寺院の建立を始めており、創建当初から神仏習合が図られていたことがうかがえる。弥勒寺は、金堂・講堂・東西塔等をもつ藥師寺式の伽藍配置の古代寺院であり、弥勒寺跡の遺構については本節D(43~53ページ)で詳細を記す。

聖武天皇が天平15(743)年に詔勅を出して始まった東大寺の大仏建立に際して、八幡神は天神地祇を率いて大仏造立を成功に導くといった託宣を出し、天平勝宝元(749)年の東大寺大仏開眼供養に際して入京した。八幡神は神々を仏世界に導く最高神として位置づけられ、国家神としての地位を確立した。

(c) 八幡信仰の広がり

八幡神は託宣を出す神として知られている。隼人の乱、東大寺大仏建立、神護景雲3(769)年に起こった宇佐八幡宮神託事件(道鏡事件)等、国家の重大事件に際して託宣を出すなど、中央勢力に対しても大きな影響力を持っていた。

上述した大仏開眼供養での入京後に東大寺鎮守八幡宮(現在の手向山八幡宮)に勧請された後、石清水八幡宮(京都府)や鶴岡八幡宮(神奈川県)等全国に広がっていく。その過程で、宇佐神宮と弥勒寺も勢力を拡大し、荘園の寄進も多く受けた。最盛期の平安時代後半には、宇佐神宮と弥勒寺の荘園は九州一円に及び、宇佐宮領1万6千町・弥勒寺領8千町という広大な範囲を領有した。本殿の替え等を目的とした式年造替(または式年造営)は、元慶4(880)年に官符により33年に1度と定められ、元亨年間(1321~1324)頃まで行われた。



宇佐宮と弥勒寺の荘園
(「八幡大菩薩の世界」より)

(d) 御許山

御許山は山頂にある3つの巨石が祀られ、原始的な磐座信仰に近いものとも考えられているが、いつごろから信仰が始まったかは不明である。標高647mある左右対称な端正な形をした山であり、宇佐平野あるいは豊前海からは非常に視認性の高い山であり、陸上海上問わず印としても利用されたと思われる。

比売神の顯現または八幡神が「行」を行ったとされる場所である。御託宣集によれば、人間菩薩と呼ばれる法蓮の僧侶団が修行してから70余年後に、靈山寺という寺院が開かれた。中野幡能氏は靈山寺の開山は9世紀中頃と推定している(中野1975、下巻)。その後、延喜19(919)年には、正覺寺が建立される。正覺寺は白山妙理権現の天童を勧請したものであり、この時期には修驗の修行場へと変貌しつつあったことがうかがえる。なお、靈山寺創設以前の御許山は馬城峰と呼ばれており、「御許山」という呼称は、文献上では承徳3(1099)年に大江匡房が御許山に法華三昧を勸修するために僧侶6口を置いたという原田莊寄進の文書が初見である。

中世の御許山では東ノ坊・西ノ坊・石垣坊・桐洞院・成就坊・谷ノ坊という6つの僧坊が造られ、現在でも六坊跡の石垣等が残っている。六坊の成立時期は不明であるが、御託宣集の絵図には東僧坊・西僧坊の二坊のみが描かれている。御許山への信仰は、鎌倉時代には六郷満山の六所権現の信仰に結び付き、御許山権現として宇佐宮のみならず、広く国東半島の天台宗末としての六郷満山の奥の院として発展した。

江戸時代中期以降に盛行した国東半島の六郷満山峰入り行では、「行」のはじまりを告げる開闢護摩が焚かれ、今も坊跡が遺構として残る。御許山の六坊跡等の遺構や文化財については本節G(60~69ページ)で詳細を述べる。

(e) 行幸会と放生会

数ある宇佐神宮の祭事の中でも、特に重要な2つの祭事が行幸会と放生会である。

行幸会は、御駿(御神体)として中津市大貞にある薦神社そばの三角池から刈り取った真瀬から枕を作り、古い御駿と交換する。その際、新しい御駿は、宇佐神宮の成立に縁のある八箇社を巡り、古い御駿は下宮に降ろされ、その前の御駿は奈多宮(杵築市)に運ばれた。祭事は8世紀末頃から9世紀前半に成立したといわれる。八箇社とは薦神社・鷹居神社・郡瀬神社・泉神社・乙咩神社・妻垣神社・小山田神社・大根川神社・田笛神社(杵築市)で、それぞれの神社は現在でも残されている。当初は4年に1度催行され、弘仁8(817)年以降は6年に1度行われた。鎌倉時代に断絶し、応永年間の大内盛見や元和元(1615)年の細川忠興の復興などもあったが、江戸時代中ごろ以降は催行されなくなった。

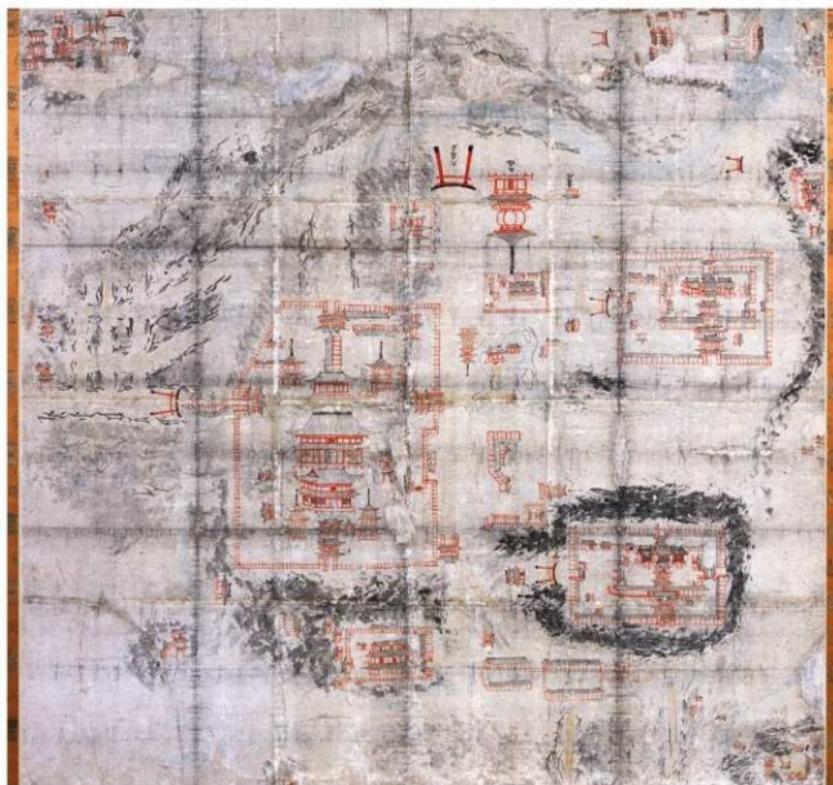
放生会は、上述した隼人の乱平定後に発生した疫病等の災厄を避けるため、弥勒寺の初代別当を務めた法蓮等の僧侶が中心となって8世紀前半に創始された。宇佐神宮を出立した八幡神が百体神社や化粧井戸を経て、和間神社の浮殿に赴き、そこから船に乗り、隼人の靈が宿ったとされる蛭を放生するという神仏習合の祭事であった。一時絶えたものの、大内盛見により応永27(1420)年に再興された。応永年間に行われた放生会は、豊前国一国の総力を擧げるだけでなく、豊後國や筑前国の一帯からも祭事に加わるほど、極めて規模の大きな祭事であった。現在では、仲秋祭と名前が変わり、規模も相当縮小しているものの、毎年10月に催行されている。

(f) 中世の宇佐宮

鎌倉時代から南北朝時代には武士の押領を受け、宇佐神宮と弥勒寺の所領も激減した。室町時代に豊前国に勢力を伸ばした大内氏は、九州の信仰の要である宇佐神宮を厚く庇護し、社殿または弥勒寺の堂宇の修理だけでなく、上記のように行幸会や放生会といった祭事の復興も支援した。



行幸会と放生会のルート(『新・宇佐ふるさとの歴史』より)



豊前国宇佐宮絵図（重文、宇佐神宮所蔵）

豊前国宇佐宮絵図と宇佐宮並弥勒寺造営指図（ともに重文）は応永 24 年（1417）頃に描かれたと考えられる絵図で、復興の状況あるいはその完成予想図ではないともされる。豊前国宇佐宮絵図は絵図の中に現代の境内地だけでなく、上記の八箇社や和間神社、御許山といった宇佐神宮に関連する神域が曼荼羅のように描かれており、宇佐神宮を中心とした信仰の世界観を示していると考えられる。これらの絵図に描かれた本殿・南中樓門・西大門・若宮神社・下宮・吳橋等の建物や西参道・正参道といった道等の位置はほとんど変化していないと考えられており、往時の宇佐神宮の景観の一部をうかがうことができるだけでなく、現存しない建物についてもその存在を推定することができる。

(g) 近世の宇佐宮

戦国時代や安土桃山時代の動乱期には、大永 3（1523）年の大火や、天正 9（1581）年の大友軍による焼討などもあり、宇佐神宮の境内地は一時荒廢していた。しかし、天正 17（1589）年には豊前国を領有した黒田長政から 300 石、慶長 6（1601）年には同じく豊前国を治めた細川忠興から 500 石が宇佐宮の神領として寄進されるなど庇護をうけ、島原藩の段階では、1000 石を与えられた。特に、細川忠興は吳橋・大鳥居・弥勒寺西大門・鐘楼等の建造物、放生会や行幸会等の祭事の復興を支援した。その後、享保 8（1723）年の上宮付近での火事や台風等により失われた建物も多くあるが、上宮や下宮等の主要な建物はその都度立て直された。また、復興の際には境内地の絵図もその都度描かれており、数多くの現存する絵図から宇佐神宮の境内地の変遷を追うことが可能である。

(h) 神仏分離と近代の造営

明治時代に神仏分離令が出されると、宇佐でも廃仏毀釈が行われた。宇佐神宮も例外ではなく、弥勒寺や菱形池そばにあった大式堂（池内法華三昧堂）から仏像が持ち出される、または、御許山などで石造物の破壊が行われるなどの影響が見られた。宇佐神宮から持ち出された仏像は、幸いにして、極楽寺や大善寺といった宇佐神宮周辺の寺院に現存している。

軍国主義が台頭していた戦前には、國威発揚を目的として全国の名だたる神社で大造営が実施された。宇佐神宮では昭和7(1932)年から昭和16(1941)年にかけて、上宮敷地の南側への拡大、社殿の修理・改築・新築だけでなく、菱形池の拡張、大尾山参道の新設、弥勒寺跡地に広がっていた神明町の撤去といった大規模な改造が行われた。現代の境内の形は、おおむねこの時の造営によるものである。

(i) 現代の宇佐神宮

第二次世界大戦後、宗教法人法の施行により宇佐神宮も宗教法人となった。祭事については、現在でも鎮疫祭（御心経会、2月）・例祭（3月）・御田植祭（6月）・御神幸祭（夏越祭、7月～8月）・仲秋祭（放生会、10月）といった各種祭事が年間を通じて日常的に行われている。宇佐市民だけでなく、市外・県外からも参拝に多くの人が訪れており、宇佐市を代表する観光地となっている。

(j) まとめ

宇佐神宮と弥勒寺は、奈良時代に現在の地に社殿が建立される前後から、隼人の乱や道鏡事件といった国家の有事に登場し、国家神としての影響力を發揮した。その結果として最盛期の平安時代後期には九州一円に荘園を領有するに至った。鎌倉時代や南北朝時代に武士の押領で荘園が縮小するにつれて宇佐神宮の影響力も一時低下するが、応永年間には豊前国守護を務めた大内氏の庇護を受けて境内地または祭事の復興や、戦国動乱期を終えた江戸時代には黒田長政や細川忠興、徳川家光といった権力者らの保護を受けて、社殿等の復興が図られた。明治時代には神仏分離を受けて弥勒寺がその姿を消したが、昭和7(1932)年から同16(1941)年にかけて大造営が行われるなど、宇佐神宮は常に信仰の対象としてあり続けた。現在でも、宇佐神宮には年間100万人を超す参拝客が訪れる。また、宇佐神宮に関する八箇社や放生会に関する神社等の文化財が宇佐市内のいたるところに残されており、宇佐地域を中心とした八幡神への信仰の広がりを感じることができる。

宇佐神宮に関する略年表

和暦	西暦	事項	備考
欽明天皇 32	571	菱形池のほとりに八幡神が顯現し、大神比義が祀る	顯現した場所については諸説あり
和銅 5	712	宇佐郡鷹居(現、鷹居神社)に八幡神を祀る	
靈龜 2	716	宇佐郡小山田(現、小山田神社)に八幡神を祀る	
養老 4	720	大隅国で隼人の乱 放生会はこの時期に開始か。	放生会の開始年代については諸説あり
神龜 2	725	小椋山に一之御殿を造営 弥勒禪院建立の託宣	
天平 5	733	小椋山に二之御殿を造営 日足に弥勒禪院を建立	
天平 9	737	八幡宮に新羅の無礼を奉告	
天平 10	738	弥勒寺金堂・講堂を建立	
天平 12	740	藤原広嗣の乱。大将軍大野東人、八幡神に祈る	
天平 13	741	藤原広嗣の乱鎮圧の功により、弥勒寺に三重塔を建立	
天平勝宝元	749	東大寺大仏開眼供養に合わせて八幡神入京 梨原宮を神宮とする。八幡大神に一品、比売神に二品を奉る	天平勝宝 4(752) 年、東大寺 庫舎那大仏開眼供養
天平勝宝 2	750	八幡神に封戸 800 戸、位田 80 町、比売神に封戸 600 戸、位田 60 町を奉る	
天平勝宝 7	755	八幡神、託宣して封戸と位田を朝廷に返還	
天平神護元	765	大尾山に八幡宮を造り、遷座	
天平神護 2	766	八幡比売神宮寺(中津尾寺)を建立	
神護景雲 3	769	宇佐八幡宮神託事件(道鏡事件)	
延暦元	782	大尾山から菱形池小椋山に遷座	
弘仁 14	823	小椋山に三之御殿を造営	
仁寿 2	852	若宮神社を造営	
元慶 4	880	官符により宇佐宮式年造営が始まる (以降、33 年ごとに造営)	
延喜 19	919	豊前国司藤原惟房が御許山に正覺寺を建立	
寛弘 6	1009	宇佐宮の宝蔵焼亡	
治安元	1021	宇佐宮の西大門出火	
永承 6	1051	弥勒寺焼亡	
康和元	1099	太宰權帥大江匡房が御許山で法華三昧を修する	
康和 3	1101	大江匡房が池内法華三昧堂を建立	
元暦元	1184	緒方惟栄による宇佐宮への焼討	
文治 4	1188	源頼朝、宇佐宮の造営を指示	宇佐宮上宮仮殿地判指図 (重文)はこの時期に作成
建久 3	1192	弥勒寺金堂焼亡	
承久 9	1198	宇佐宮の西大門焼亡	
承元 3	1209	法印祐清、京にて孔雀文器を鋳造し、弥勒寺に寄進	孔雀文器(国宝)
建長 5	1253	宇佐宮の上宮焼亡	
宝治元 ～文永 5	1247 ～ 1268	栄尊による弥勒寺金堂造営	
延慶 2	1309	社頭松隈より出火、宇佐宮寺悉く焼亡	
応長元	1311	弥勒寺寺務通清、弥勒菩薩像・薬師如来像を造立	木造薬師如来坐像(重文) 現在、大善寺に安置
正和 2	1313	宇佐宮学頭神咲、「八幡宇佐宮御託宣集」を編纂	
康永 4	1345	中津尾寺は榮興寺となる	
貞和 6	1350	御許山登山道に町石塔婆を建てる	
正平 13	1358	征西將軍懷良親王、宇佐宮に剣を奉納	白鞘入剣(重文)

和暦	西暦	事項	備考
応永2	1395	足利義持、宇佐宮寺の造営を指示	
応永25 ～永享3頃	1418 ～1431	大内氏による宇佐宮の造営	宇佐宮並弥勒寺造営指図、 豊前国宇佐宮絵図(共に重文)はこの時期に作成
永享2	1430	弥勒寺金堂の本尊(薬師如来像)、講堂の弥勒菩薩像に彩色	木造弥勒仏坐像(県有文)、 現在、極楽寺に安置
長享3	1489	宇佐宮、宮迫十坊・下宮焼亡	
永正4	1507	足利義澄、宇佐宮の造営を指示	
大永3	1523	宇佐宮の上宮、弥勒寺金堂焼亡	
天文4	1535	上宮一之御殿立柱上棟、立柱小屋入り	宇佐宮上宮造営指図(重文) はこの年作成
天文13	1544	足利義晴、宇佐宮の造営を指示	
天正4	1576	大友軍による宇佐宮焼討、本殿、末社等悉く焼亡	
慶長3 ～寛永元	1597 ～1624	細川忠興による宇佐宮の造営	
寛永4	1627	宮成大宮司等が細川氏による宇佐宮寺の復興を書き上げる	翌年、寛永5年絵図(県有文) 作成
享保8	1723	在家からの出火で上宮、宮迫の万徳坊、有徳坊等が焼亡	
享保13 ～寛保2	1728 ～1742	上宮等の造営	島原藩絵図(2点)はこの 時期に作成
宝曆9	1759	池内法華三昧堂(大式堂)上棟	
寛政3	1791	御許山の参道に町石を造立	
安政6	1859	上宮二之御殿上棟	現在の社殿
万延元	1860	上宮一之御殿上棟	現在の社殿
文久元	1861	上宮三之御殿上棟	現在の社殿
元治元	1864	臨時奉幣祭	宇佐奉幣使参向順路図(県 有文)、蓑虫山人絵日記(2 枚)はこの年作成
慶応4	1868	御許山騒動。西ノ坊、石垣坊等に放火	
明治5	1872	官幣大社宇佐神宮となる	
大正6	1917	上宮本殿三宇改修	
昭和7 ～昭和16	1932 ～1941	昭和の大造営	
昭和21	1946	宗教法人宇佐神宮となる	
昭和27	1952	宇佐神宮本殿(三棟)が国宝に指定	
昭和52	1977	宇佐神宮社叢が国指定天然記念物に指定	
昭和61	1986	宇佐神宮境内が国指定史跡に指定	
平成3	1991	台風19号で宇佐神宮、御許山が被災	
平成25 ～平成27	2013 ～2015	国宝宇佐神宮本殿保存修理工事	

B 宇佐神宮地区の建造物

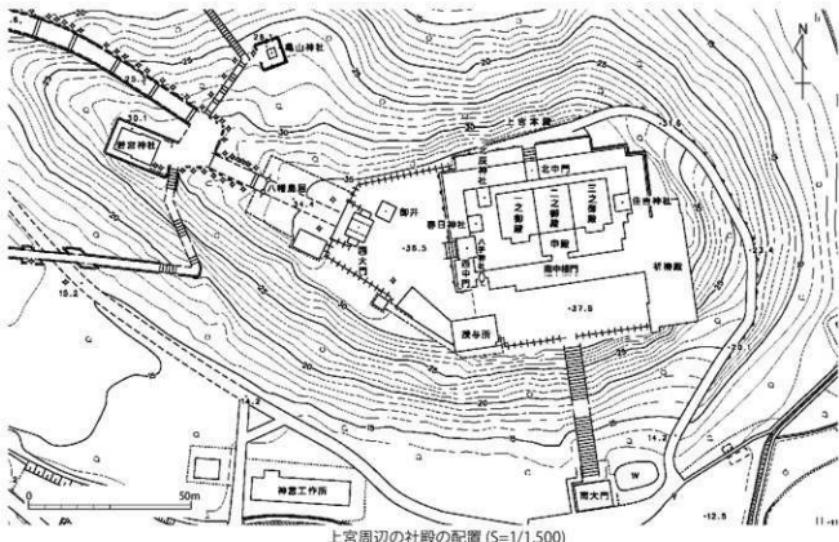
宇佐神宮地区的建造物は、大きくは小椋山(亀山)上の上宮、その西の山下にある下宮、そしてそれ以外の区域の建造物の3つに大別できる。以下、それぞれの区域毎に建造物を概観する。

(a) 上宮の諸社殿

小椋山の山上にあって、本殿を中心とする社殿はほぼ南面して建つ。本殿は、西から東へ一之御殿、二之御殿、三之御殿が並ぶ。二之御殿の正面に申殿を配する。また、一之御殿の西側に東面する春日神社を、その北側に南面して北辰神社を、三之御殿の東側に、春日神社と対照的な位置に西面する住吉神社を配置する。申殿の正面には、南中樓門を建て、左に西回廊、右に東回廊を接続する。さらに正面の東西回廊から北側にかけて上間回廊を巡らして囲み、途中、東には東中門を、西側には西中門を、北側に北中門を設ける。

回廊の外、一段下がった敷地の南側には南大門、西側にはやや離れて神井上屋、西大門が建つ。

西大門の前には、八幡鳥居が建ち、石段を下がった位置には若宮神社が、さらにその北側には亀山神社がある。以上が上宮に位置する建造物である。



本殿 一之御殿・三之御殿(右は申殿)



申殿

一之御殿から三之御殿の3殿は、いずれもいわゆる八幡造である。内院と外院と両者をつなぐ造り合からなる。内院は桁行3間、梁間2間、切妻造、檜皮葺、外院は桁行3間、梁間1間、切妻造、檜皮葺で、造り合は桁行3間、梁間1間である。内院と外院の切妻造が棟を平行にして接することでできる屋根の谷下に金銅製の雨樋を入れて雨を受けて豎樋に落とす独自の形式である。一之御殿と三之御殿は正面に一間の檜皮葺の向拝付で、木階を設ける。これに対し二之御殿には向拝、木階とも設けていない。3殿とも内院・外院とも縁を廻らすが、縁東も円形断面で最高級の表現としている。現在の本殿の建立年代については、「小山田文書」によって、一之御殿が万延元(1860)年、二之御殿が安政6(1859)年、三之御殿が文久元(1861)年に上棟していることが明らかである^①。本殿はいずれも昭和27(1952)年に国宝に指定されている。

中殿は、桁行3間、梁間2間、入母屋造、檜皮葺である。『大分県の近世社寺建築』(大分県教育委員会1987)によれば、昭和15(1940)年に現在の位置に移動させて、南中樓門との間に渡廊を造ったらしい、それ以前には、中殿はもう少し南にあったという。高欄の銘金具銘に元治元(1864)年の陰刻があって、このときの建立と考えられる。

春日神社は、桁行3間、梁間2間、切妻造、檜皮葺で、建立年代は文久2(1862)年である。



春日神社



北辰社



住吉神社



回廊



南中樓門



西中門

北辰神社は、桁行1間、梁間1間、切妻造、檜皮葺の内院と、桁行1間、梁間1間、切妻造、檜皮葺の外院を通り之間でないだ八幡造である。外院の南面に向拝や木階ではなく、東面の通り之間に妻戸を入れて木階を設けている。このような南を正面としない北辰神社の形式が、北辰神社が地主神を祀ることを併せて考えると、八幡造の古制を伝えているとする見解がある一方^②本殿を簡略化したに過ぎないとする説^③もある。昭和43(1968)年に大分県指定有形文化財となっている。

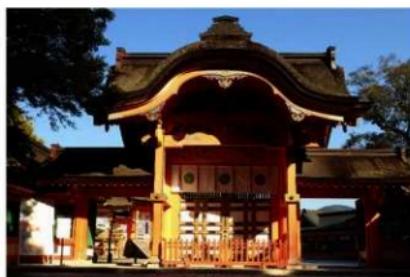
住吉神社は、桁行3間、梁間2間、切妻造、檜皮葺で、構造形式は、組物や勾欄や正面扉の幣軸の納まり以外は、春日神社と同一である。建立年代は元文4(1739)年であるとされる。

南中樓門は、3間1戸樓門で、入母屋造、檜皮葺で、組物は下層は拳鼻付き三手先斗栱、上層では尾垂木付き三手先斗栱として華やかである。下層は、左右の回廊につながる後方では床を張るが、回廊よりも一段低くなる。「到津文書」第467号には、寛保2(1742)年に建立されたと記されていて、この頃に建てられたと考えて良いであろう。単層ではなく、下層・上層から成る楼造となったのは、遅くとも11世紀初頭で、「樓拌殿造」とも言われるこの形式の門は、奈良の東大寺八幡宮に始まり、山口県の山口地方へ、そして大内氏の豊前支配によって宇佐神宮や、大分市の柞原八幡宮に伝えられたのではないかとみられている^④。昭和43年に大分県指定有形文化財となった。

西大門は、四脚門で、切妻造、表裏に軒唐破風付、檜皮葺で、左右に脇門を付属する。祭礼では神輿が下を通る境内でも規模の大きな門で、親柱間に架け渡された虹梁上、そして親柱の前後に立つ控柱間に架けられた虹梁上に幕股を置き、妻飾も虹梁幕股で、それぞれの幕股に彩色された彫物があってさらに、唐破風下や妻の幕股の周囲は彩色で飾られるので、境内でも最も華やかな門である。建立年代は、このような彫物や彩色の状況から江戸時代後期であろうことは容易に推定できるが、詳細な検討が必要である。昭和43年に大分県指定有形文化財となった。

八幡鳥居は、反りをもつ笠木に檜皮を葺き、柱上に台輪を載せ、撥束を入れないという特徴をもつ。文久3(1863)年に修理したことがうかがえる。昭和44(1969)年に大分県指定有形文化財となった。

若宮神社拝殿は、桁行3間、梁間1間の身舎の四面庇平面で、入母屋造、檜皮葺である。すべて丸柱の建物であるが、庇の正面および側面は吹き放ちで、極めて開放的な建物である。若宮神社本殿は、桁行3間、梁間2間、切妻造、檜皮葺で、先の拝殿とともに天保8(1837)年に建立されたとみられる。



西大門



亀山神社



八幡鳥居

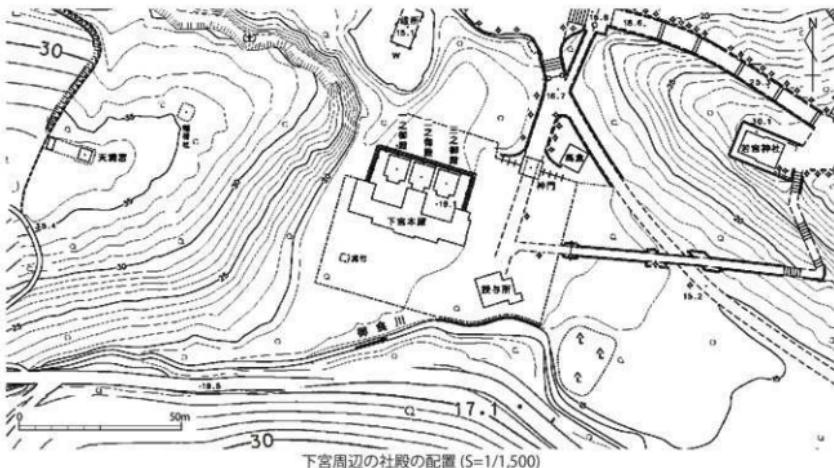


若宮神社拝殿

(b) 下宮の諸社殿

下宮でも、諸社殿はほぼ南面する。西から東に、一之御殿、二之御殿、三之御殿が建つ。二之御殿前には、申殿、その前方に下宮正門と左右に西回廊、東回廊が建つ。これらの東に神門が建つ。

下宮の本殿、すなわち一之御殿、二之御殿、三之御殿は、いずれも桁行(正面)3間、梁間(側面)2間、切妻造、正面1間向拝付、檜皮葺である。建立年代は、一之御殿が文化14(1814)年、二之御殿が文政7(1824)年、三之御殿が文政9(1826)年とされる。二之御殿の前に立つ申殿は、桁行1間、梁間1間、入母屋造、檜皮葺である。その前に建つ正門は、四脚門、切妻造、檜皮葺で、左右に脇門・脇拂付で、その左右には回廊が取りつく。東西の回廊は、それぞれ6間の単廊で、申殿・正門・回廊は、いずれも昭和11(1936)年の工事によるものである。下宮神門は、四脚門、切妻造、檜皮葺である。左右に脇門・脇拂が付く。記録に享保15(1730)年建立とあり、その頃の建築とみられる。



下宮回廊



下宮神門

(c) その他の諸社殿

下宮神門の外には高倉、下宮の北、表参道の西側に春宮神社、八坂神社、さらに北側には勅使斎館、神宮庁がある。またこれらの西方には、琴平神社があり、寄藻川に呉橋が架かる。反対の東側には頓宮、さらに護王神社、大尾神社がある。このほか大鳥居の外に表参道の西側に黒男神社がある。

春宮神社は、桁行3間、梁間2間、切妻造、向拝1間付、檜皮葺で、昭和12(1937)年竣工(棟札)の建物、八坂神社は、桁行3間、梁間1間、切妻造、檜皮葺で、明治9(1876)年の建物で、昭和13(1938)年に改修している。

高倉は、高床の板倉、寄棟造、檜皮葺である。下層を丸柱を立てて桁行2間、梁間2間とするが、柱間は桁行が広く、全体に長方形をなす。柱間は板壁とし、正面左に片引きの板戸を入れて入り口とする。上層は柱を立てず、下層とほぼ同じ平面の板倉とし、正面中央に扉を設ける。建立年代は、神宮の記録にある慶応元(1865)年と考えられる。昭和43(1968)年に大分県指定有形文化財となった。

宇佐神宮、勅使斎館はともに木造、平屋建、入母屋造、銅板葺で、神宮庁は昭和12年の新築であるが、勅使斎館については、一見、神宮庁と同時期の近代和風建築にみえるが詳細調査が必要である。

琴平神社は、新しい覆屋に納められた一間社流造、厚板葺で、享和元(1801)年の建築である。

呉橋は、廊下橋で、桁行13間、梁間1間、向唐破風造、檜皮葺の橋である。川幅が広げられたため、西側にコンクリートの橋脚を1基加えていて、2間分は増築である。両側面は腰板壁に連子窓の構成とするが、増築部は腰下も連子窓とする。橋の両端には腰より上部に格子、下を板張りとする外開き戸を入れる。内部は棟木を支持する虹梁幕板をみせる化粧屋根裏である。東側の擬宝珠金物には、施主細川忠利の名前と「于時元和壬戌十一月吉日」の陰刻があって、元和8(1622)年に細川忠利が建設に関わったことが知られるが、現在の建物は記録にもみられる明治9(1876)年の工事による部分が多いと思われる。昭和43年に大分県指定有形文化財となった。

黒男神社は、桁行1間、梁間1間、切妻造、檜皮葺で、安政2(1855)年建立であるという。



八坂神社



高倉



呉橋



勅使斎館(右)と宇佐神宮庁(左)

護王神社は、一間社流造、鉄板葺で、昭和 11(1936) 年の建築、頓宮は、三間社流造、檜皮葺の本殿、桁行 3 間、梁間 1 間、切妻造、銅板葺で、左右に 2 間の翼廊付、桁行 3 間、梁間 3 間、入母屋造、檜皮葺の神輿庫からなり、本殿は昭和 11 年、神輿庫は昭和 12(1937) 年、拝殿は昭和 61(1986) 年の火災後の建築であり、大尾神社は、一間社流造、銅板葺の本殿と桁行 3 間、梁間 2 間、切妻造、銅板葺の拝殿からなる昭和 16(1941) 年の建築である。



頓宮



頓宮 神輿庫（御神幸祭の神輿収納時）



護皇神社 本殿



大尾神社 本殿

【註釈】

※ 1 土田充義 1998 「宇佐神宮本殿」『日本建築史基礎資料集成一 社殿 I』中央公論美術出版

※ 2 太田静六 1977 「宇佐神宮社殿の祖形について 八幡造の祖形と源流の変遷 其 1」『日本建築学会論文報告集』第 252 号, pp.101-102

※ 3 土田充義 1963 「八幡宇佐宮応永造替の本殿」『日本建築学会論文報告集』第 211 号, p.42

※ 4 佐藤正彦 1994 「祭祀施設としての宇佐神宮南中門 九州における樓拝殿造の一考察」『建築史学』23 号の注 10 参照

【参考文献】

澤村仁・佐藤正彦「宇佐神宮 史跡指定地内 建造物台帳」平成 3 年度 宇佐神宮蔵

C 宇佐神宮・御許山に関する古文書・絵図・古写真等

神亀2(725)年に上宮本殿(一之御殿)が現在の位置に建てられてから、弥勒寺の堂塔や各種社殿が次第に建立された。「宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起」や「八幡宇佐宮御託宣集」といった多くの古文書が残る宇佐神宮では、造営の歴史も記録されており、境内地の変化を文献から知ることが出来る。古文書の大部分は『宇佐神宮史』(全16巻)や『大分県史料』等に翻刻されており、研究等へ活用されている。

宇佐神宮では、上宮・下宮本殿等の定期的な建替え(式年造替)が行われたほか、火災等で失われた社殿や弥勒寺の堂宇等の造営が何度も行われた。宇佐神宮の社殿について描いた現存する最古の絵図である「宇佐宮上宮仮殿地判指図」(12世紀後半制作)は上宮とその周辺の建造物の配置等がよくわかる。境内全域を描いた絵図としては、「宇佐宮並弥勒寺造営指図」と「豊前国宇佐宮絵図」(どちらも応永24(1417)年頃制作か)がある。前者は応永期の建物の配置や柱間がよくわかる絵図であり、後者の絵図では現在の境内地以外にも放生会や行幸会といった宇佐宮の祭事に関連する神社が描かれる。これらの他にも、近世以降の造営のためと考えられる計画図や、一般参拝者向けの案内図、宇佐神宮を訪れた文人の残したスケッチ等から、各時代の境内の様子や建物の配置の変遷等が追える。

写真技術が普及した近代以降の資料として、宇佐神宮の発行した絵はがき、地元住民や参拝者が撮影した写真、航空写真等が多く残る。

表2-5-1 宇佐神宮を描いた主な絵図

番号	名称(指定区分)	制作年代	所有	内容
1	宇佐宮上宮仮殿地判指図 (国重文、宇佐神宮造営 図3点の内1点)	文治年間 (1185-1190)	宇佐神宮	文治年間の正殿仮殿造営における豊後國荘園公領の造営分担を明記。上宮・若宮の規模と建物配置が確認できる。宇佐宮の建物配置等を記した、現存する最古の絵図。
2	豊前国宇佐宮絵図 (国重文)	応永24(1417) 年頃	宇佐神宮	大内氏による応永年中の復興状況を描いたものか、あるいはその完成予想図。宇佐神宮全体を描寫した最古級の絵図
3	宇佐宮並弥勒寺造営指図 (国重文、宇佐神宮造営 図3点の内1点)	応永24(1417) 年頃	宇佐神宮	大内氏による応永年中の造営指図と言われ、宇佐神宮全体を描寫した最古級の絵図。能舞台が図示されず、2と若干相違する。
4	宇佐宮上宮造営指図 (国重文、宇佐神宮造営 図3点の内1点)	天文4(1535) 年	宇佐神宮	天文4年の裏書きあり。4と西大門南側の玉垣、幣殿、経蔵の位置、及び東中門・北中門と堀の接続点等が若干相違する。
5	寛永5年絵図	寛永5(1628) 年	永青文庫	絵図に貼付けた寛永5年2月付け宇佐大宮司等連署の願書、及び「三斎公御建立」「三斎公御修理」と書いた押紙から、この年までの建立・修理の報告と同時に取り残された建物の再興を願い細川氏に提出した絵図
6	到津家所蔵宇佐宮絵図	17世紀中頃	個人	弥勒寺は指図で表現。馬場大鳥居北側の領宮(延宝8(1680)年造立)や亀山社(天和2(1682)年造営)が描かれず、上宮南側の道が坂道(天和2年に百段造営)として描かれることから、延宝8年以前の制作か。
7	島原藩絵図(1)	享保8(1723) 年	松平文庫	享保8年の宇佐宮回禄状況を島原藩に報告した絵図。
8	島原藩絵図(2)	寛保2(1742) 年	松平文庫	享保12年から寛保2(1742)年にかけての造営復興状況を島原藩に報告した絵図。
9	豊前国宇佐宮図	18世紀中頃	陽明文庫	到津公著献上の絵図。基本的には8と同じだが、明らかな虚像部分(馬場大鳥居、八坂神社東の樓門、春宮等)もある。上宮御朱印裁(寛延2(1749)年造営)が存在しないことから、寛保2年から寛延2年までに制作か。

番号	名称(指定区分)	制作年代	所有	内容
10	豊前宇佐八幡宮細見図	18世紀中頃	内閣文庫	『八幡宇佐宮繫三』(天明4(1784)年発行)所収の一般社頭図。8と酷似するが、描写もれの建物あり。菱形池の龍神初見。下宮の門が東側(宝曆8(1758)年北側に位置変更)で、上宮御朱印藏が存在しないことから、寛保2年から寛延2年までに制作か。
11	水戸彰考館所蔵 宇佐宮絵図	18世紀後半	水府明徳会	虚像部分(仮宮・八坂社東の楼門・直相殿等)が顕著。宝曆8年造営の下宮の門(北)や下宮北側に東宮等が確認できるが、安永3(1774)年造立の大尾神社鳥居や弥勒寺祝堂上の天神社(祠)が確認できない
12	宇佐宮境内図 (県有文、宇佐神宮所蔵 絵図等12点の内1点)	18世紀第3四半期	宇佐神宮	馬場大鳥居(宝曆7(1757)年建立)が描かれる。宝曆8(1758)年に東向きから北向きに変更された下宮御門が描かれる。安永3(1774)年造立の大尾神社鳥居や弥勒寺祝堂上の天神社(祠)が確認できない。 菱形池北側の上宮頓宮・下宮頓宮が描かれる(この時期には現存しない)、上宮の神輿屋と護摩堂の位置が逆転している、弥勒寺金堂の屋根が宝形造でなく寄棟造になる等の齟齬がある。
13	安政4年再鑄 日本第一八幡宇佐宮境内略図木版 (県有文、宇佐神宮所蔵 絵図等12点の内1点)	19世紀前半	宇佐神宮	安政4(1857)年再発行の一般向け木版社頭図。虚像部分(上宮の南大門・北大門・東大門等)もみられる。 弥勒寺南西側の琴平社(享和元(1801)年勅請)や浅瀬川の石橋(文政10年(1827)年造立)が確認できるが、文政10年勅請の稲荷社や同12年上宮寄進の金灯籠が表現されていない。文政10年頃作製の木版を修正せず、そのまま再刻したものか。
14	文久4年 宇佐奉幣使參向順路図 (県有文、宇佐神宮所蔵 絵図等12点の内1点)	文久4(1864) 年	宇佐神宮	元治元年に宇佐奉幣使(勅使)が宇佐宮へ参向する際の詳細なルート計画図。文久4(1864)年2月に宇佐宮引頭の並松数株によって作成された。 宇佐奉幣使一行が通る道筋を道の中央に引いた赤線で示し、宇佐の街並み等も描く。参向順路に西参道が入っておらず、当時の廃仏毀釈思想を反映したものか。
15	蓑虫山人絵日記(上) 豊前国宇佐大神宮	元治元(1864) 年	個人	元治元年に、蓑虫山人(本名:土岐源吾)が宇佐八幡を参拝した際に描いたスケッチ画。宇佐神宮周辺を北側から俯瞰した構図で、百体神社から吳橋までの勅使街道沿いの街並みや、弥勒寺の西大門・金堂・講堂・鐘樓、八坂神社、御許山等が描かれる。
16	蓑虫山人絵日記(上) 其二上宮	元治元(1864) 年	個人	元治元年に、蓑虫山人(本名:土岐源吾)が宇佐八幡を参拝した際に描いたスケッチ画。宇佐宮の大鳥居、正参道、上宮周辺や本殿3棟、菱形池の大式堂・天満宮・御靈水等が描かれる。
17	宇佐宮絵図 (県有文、宇佐神宮所蔵 絵図等12点の内1点)	19世紀中頃	宇佐神宮	上宮の南中門北側の東西に灯籠1対(天保3(1832)年献上か)を描く。弥勒寺区域では、講堂(嘉永3(1850)年に倒壊)・金堂は描かれないと、吳橋・西大門・御藍・鐘樓・経蔵・祇園社等が描かれる。表参道大鳥居の北東には到津大宮司館、北には円通寺や大乗寺、宮なり大宮司館等も描かれる。

番号	名称(指定区分)	制作年代	所有	内容
18	明治6年 八幡大神宮境内図 (県有文、宇佐神宮所蔵絵図等12点の内1点)	明治6(1873)年	宇佐神宮	明治6年9月3日、教部省に提出した絵図の控。境内地の字名と坪数を明記。廃仏毀釈で弥勒寺が廃寺となり、上宮の護摩堂や如法堂、菱形池の大式堂等が撤去されたことが分かる。
19	宇佐神宮境内風致図 (県有文、宇佐神宮所蔵絵図等12点の内1点)	明治6(1873)年頃か	宇佐神宮	18の絵図と酷似。神仏分離後の宇佐神宮境内の景観を表現する。弥勒寺跡の祖靈社や八坂神社西の宿直所、現在の神宮庁付近と菱形池の北側は描かれない
20	明治8年 上宮仮殿地判指図 (県有文、宇佐神宮所蔵絵図等12点の内1点)	明治8(1875)年	宇佐神宮	明治8年10月31日制作。Iの絵図を模写した縮小図。裏書には「畫工者云、元圖工役所附文字不明亮之分者、以朱字朱畫表之、後之見者、宜得其意云」とある。
21	明治15年 宇佐神宮境内見取図 (県有文、宇佐神宮所蔵絵図等12点の内1点)	明治15(1882)年	宇佐神宮	明治15年3月、内務省に提出した絵図の下書。当時の宇佐神宮の景観を写実的に描く。弥勒寺跡では、吳橋・西大門・八坂神社・同鳥居と祖靈社を描き、西参道が石骨であること等を表現している。弥勒寺跡の出店(現在の神宮庁付近)と菱形池の北側は描かれない。
22	明治25年 官幣大社宇佐神宮全景銅版 (県有文、宇佐神宮所蔵絵図等12点の内1点)	明治25(1892)年	宇佐神宮	宇佐神宮の景観を立体的に表現した一般向けの境内案内図の銅版。
23	明治28年 宇佐神宮境内見取図 (県有文、宇佐神宮所蔵絵図等12点の内1点)	明治28(1895)年	宇佐神宮	明治28年6月、内務省に提出した絵図の控。山林・建物・平地・田・宅地・池川・原林を色分けする。西参道の北側全域が宅地となり、菱形池には護皇神社・鶴馬舎・木匠祖神社・稻荷神社等が描かれる。
24	官幣大社宇佐神宮全景図	明治31(1898)年	宇佐市	明治31年4月再版。宇佐神宮の景観を立体的に表現した、一般参拝者向けの案内図。弥勒寺の北側部分が一部省略される他は、境内地の建物を詳細に描いている。
25	宇佐神宮境内地図 (県有文、宇佐神宮所蔵絵図等12点の内1点)	昭和初期頃	宇佐神宮	宇佐参宮線(大正5(1916)年全線開通)が描かれており、境内地に民家が存在することから、昭和の大造営(昭和7(1932)~同16(1941)年)以前に制作された地形図。縮尺は1/3000
26	『宇佐神宮昭和御造営』 官幣大社宇佐神宮境内全図	昭和16(1941)年	宇佐市ほか	宇佐神宮の昭和の大造営(昭和7(1932)~同16年)を記念して発行された冊子の挿図。描かれているのは現在の境内地と北側の宇佐参宮線まで。社殿等は現在の配置と一致する。
27	『宇佐神宮昭和御造営』 宇佐神宮鳥瞰図	昭和16(1941)年	宇佐市	宇佐神宮の昭和の大造営(昭和7(1932)~同16年)を記念して発行された冊子の挿図。大造営後の宇佐神宮の鳥瞰図。八坂神社の東側に總門(現存しない)が描かれており、大造営の完成形をイメージしたものか。

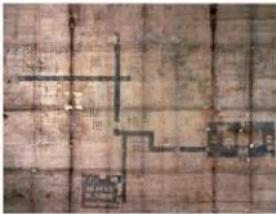
宇佐神宮地区を描いた主な絵図1(番号は表2-5-1と対応。15・16以外は絵図の上を北に統一して掲載)



1 宇佐宮上宇宮仮殿地判指図



2 豊前国宇佐宮絵図



3 宇佐宮並弥勒寺造営指図



4 宇佐宮上宮造営指図



5 寛永 5 年絵図



6 到津家所藏宇佐宮絵図



11 水戸影考館所藏宇佐宮絵図



12 宇佐宮境内図



14 文久 4 年宇佐奉幣使参向順路図

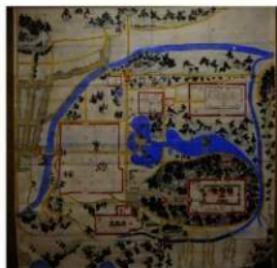


15 菅虫山人絵日記(上) 豊前国宇佐大神宮



16 菅虫山人絵日記(上) 其二上宮

宇佐神宮地区を描いた主な絵図2(番号は表2-5-1と対応。24・27以外は絵図の上を北で統一して掲載)



17 宇佐宮繪図



18 明治6年八幡大神宮境内図



19 宇佐神宮境内風致図



20 明治8年上宮仮殿地判指図



21 明治15年宇佐神宮境内見取図



22 明治28年宇佐神宮境内見取図



24 官幣大社宇佐神宮全景図



25 宇佐神宮境内地図



26 官幣大社宇佐神宮境内全図



27 宇佐神宮鳥瞰図

表2-5-2 御許山を描いた主な絵図

番号	名称(指定区分)	制作年代	所有	内容
28	『八幡宇佐宮御託宣集』 御許山の部分図 (県有文)	正和2(1313)年	宇佐神宮	正和2(1313)年編纂の『八幡宇佐宮御託宣集』所収。御許山山頂を描写した現存する最古の絵図。講堂・鐘楼・護法堂・觀音堂・不動堂・僧坊・参道等が描かれる。
29	天保4年 御許山絵図 県有文、宇佐神宮所蔵 絵図等12点の内1点)	天保4(1833)年	宇佐神宮	御許山山頂の講堂・鐘楼・紙團社(大元八坂神社)・僧坊・参道等を詳細に描写する。標高を等高線で表現しており、写しの可能性もある。
30	蓑虫山人絵日記(上) 御許山図	元治元(1864)年	個人	元治元(1864)年に、蓑虫山人(本名:土岐源吾)が御許山を参拝した際に描いたスケッチ画。仁王門・成就坊・西ノ坊・石垣坊・不動堂・拝殿等が描かれる。
31	小倉県管内第91区宇佐郡日足村耕地山林図	明治7(1874)年 頃か	個人	日足村内の土地について、種別等が色分けされる。御許山も日足村の部分(参道より東側)が描かれ、「成就坊跡」、「相洞院跡」、「東之坊跡」などが記される。

御許山地区を描いた主な絵図(番号は表2-5-2と対応。29は絵図の上を北にして掲載)



29 天保4年御許山絵図



30 蓑虫山人絵日記 御許山図



31 小倉県管内第91区宇佐郡日足村耕地山林図

D 弥勒寺跡

宇佐宮の社殿が小椋山に建てられた神亀2(725)年に日足に建立されたとされる弥勒禪院・勝恩寺が、天平9(737)年に小椋山の西側に移されたのが弥勒寺である。金堂・講堂・東西三重塔等をもつ薬師寺式の伽藍配置をもつ古代寺院であり、神社と寺院が同じ境内に建立された最初の事例とされる。金堂は天平10(738)年に建立され、その後天平15(743)年には東西の三重塔が建立される等、堂宇の建築が行われた。

伽藍の北には僧坊や宝塔等が隨時建立され、宇佐宮境内西側の大部分が寺域や僧坊として利用されたことが絵図等に記されている。弥勒寺の建物は火事や災害に見舞われて度々建替えられたことが古文書等に記録されているが、近世後半以降は衰退し、明治時代には西大門等の一部の建物を除いて失われていたことが知られている。

現在は、宇佐神宮西参道南側に講堂や金堂の礎石が一部残存する。

前項で述べたとおり、弥勒寺跡の発掘調査は大分県教育委員会が昭和29(1954)年から同35(1960)年に実施した他、昭和56(1981)年から昭和63(1988)年にかけて大分県立風土記の丘歴史民俗資料館(現、大分県立歴史博物館)による調査、宇佐市教育委員会による調査が行われ、東西の塔跡や輪蔵跡、鐘楼跡等の遺構が確認された。

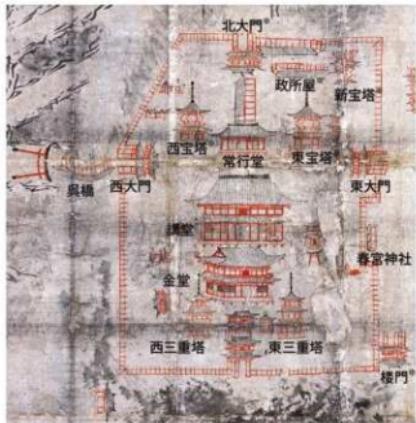


元治元(1864)年 菓虫山人絵日記(上) 豊前国宇佐大神宮 弥勒寺付近(個人蔵、写真提供:大分県立歴史博物館)



応永の絵図を基に作成された弥勒寺跡の建物ジオラマ(大分県立歴史博物館蔵)

絵図等による記載（弥勒寺周辺、絵図の上を北に統一、＊は未確認の建物）



応永 24(1417) 年頃か 豊前国宇佐宮繪図
弥勒寺付近 (国重文、宇佐神宮所蔵)



応永 24(1417) 年頃か 宇佐宮並弥勒寺造営指図
弥勒寺付近 (国重文、宇佐神宮所蔵。)



寛永 5(1628) 年、宇佐宮繪図
弥勒寺付近 (永青文庫所蔵)



17世紀中頃 宇佐宮繪図
弥勒寺付近 (到津家所蔵)



18世紀第3四半期頃 宇佐宮境内図
弥勒寺付近 (県有文、宇佐神宮所蔵)



昭和初期頃 宇佐宮境内地図
弥勒寺付近 (県有文、宇佐神宮所蔵)

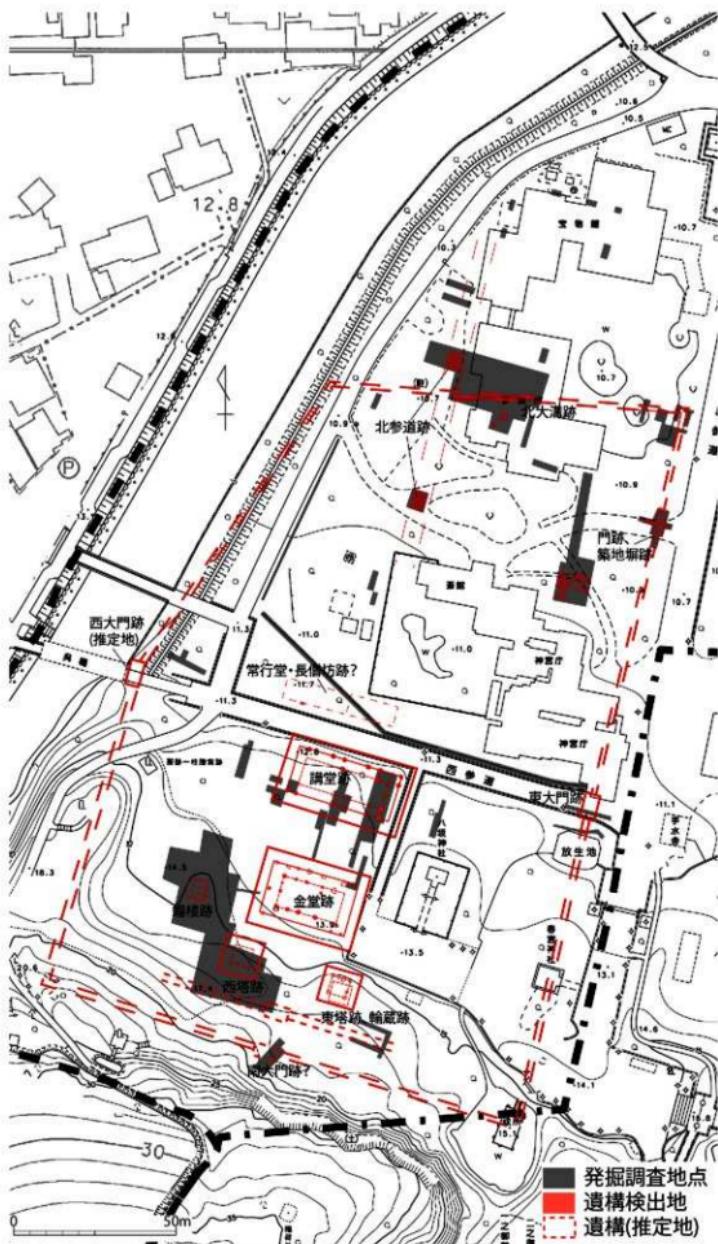


図 2-5-1 弥勒寺跡周辺の発掘調査地点・主要遺構配置図 (S=1/15,000)

(a) 講堂跡

位置：西参道南側

規模：

- ・基壇平面東西 37 m以上×南北 19 m以上
- ・柱間：桁行 9間(33.3 m)、梁行 4間(13.6 m)

時期：8世紀～近世

(数次の建替え、基壇拡張あり)

調査年次：昭和 60(1985)～同 61(1986) 年

報告書：『弥勒寺』

備考：礎石現存

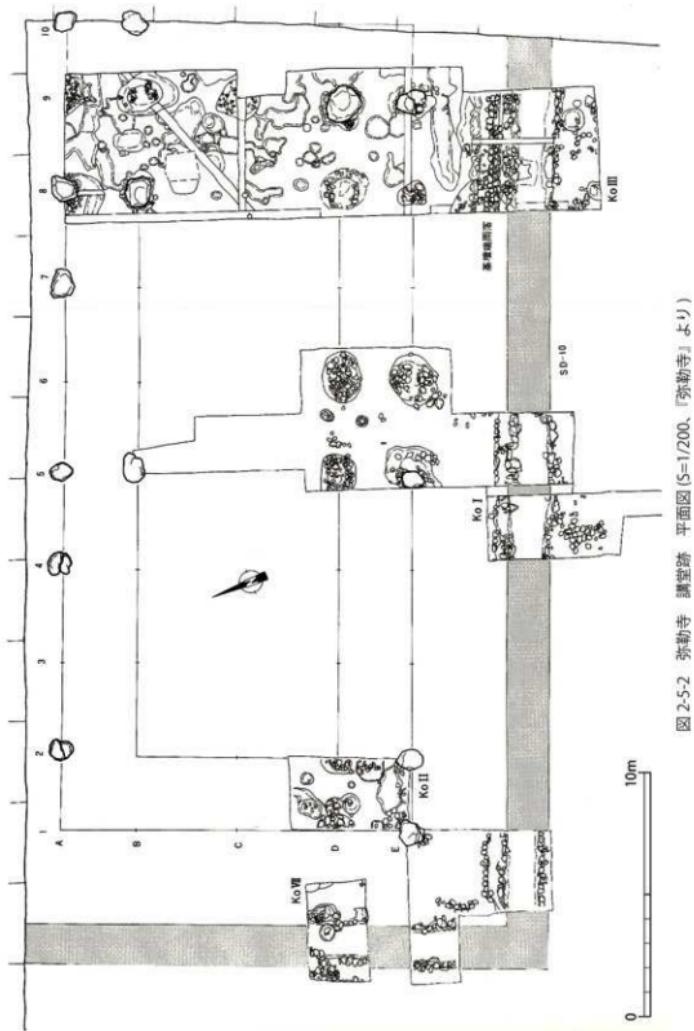


図 2-5-2 弥勒寺 講堂跡 平面図 (S-1/200、『弥勒寺』より)

(b) 金堂跡

位置：講堂南端から約 15 m 南

規模：

- ・基壇平面東西 27 m 以上 × 南北 21.5 m
- ・柱間：桁行 7 間 (27.2 m) × 梁行 4 間 (16.6 m)

時期：8世紀初頭～近世

(数次の建替えあり)

調査年次：昭和 29～35 年

報告書：『弥勒寺遺跡』

備考：礎石現存

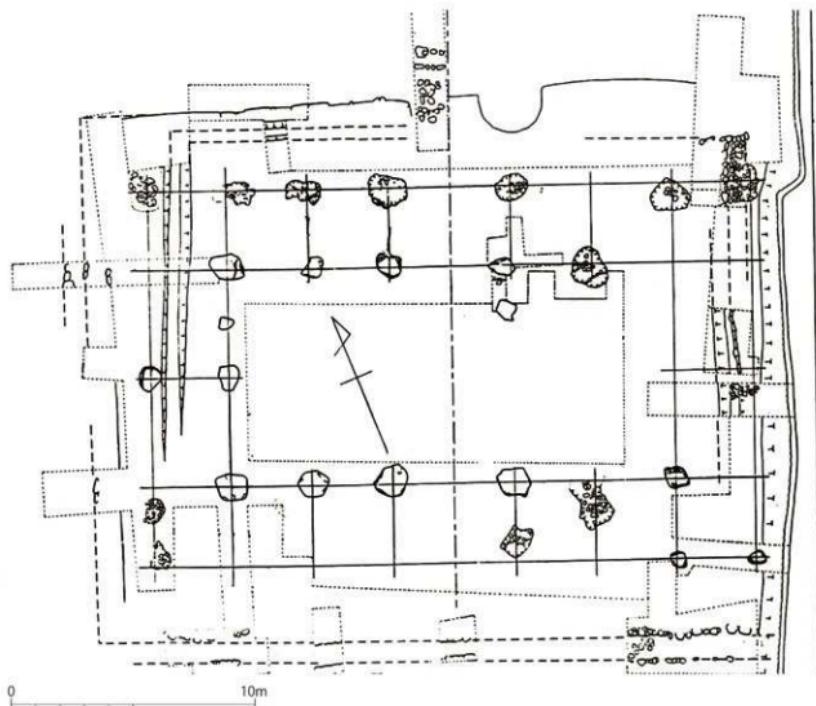


図 2-5-3 弥勒寺 金堂跡 平面図 (S=1/200、『弥勒寺遺跡』より)



応永の絵図を基に作成された弥勒寺跡の建物ジオラマ 金堂付近 (大分県立歴史博物館蔵)

(c) 東塔跡、輪藏跡

東塔跡

位置：金堂基壇南東端から約 5.5 m 南

規模：

- ・基壇平面 東西 11.95 m・南北 10 m 以上
- ・柱間 3 間 (5.5 m) × 3 間 (5.5 m)

時期：8世紀～9世紀前半

調査年次：昭和 29～35 年

備考：輪藏跡と重複

輪藏跡

位置：西参道沿い

規模：14 世紀？

- ・基壇平面 東西 11.95 m・南北 10 m 以上

- ・柱間 柱行 3 間 (5.9 m) × 梁行 3 間 (5.9 m)

調査年次：昭和 29～35 年

報告書：『弥勒寺遺跡』

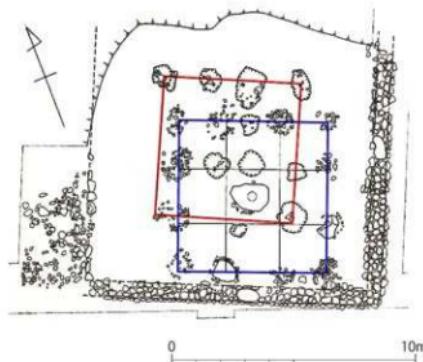


図 2-5-4 弥勒寺 東塔跡(赤)・輪藏跡(青) 平面図
(S=1/200、「弥勒寺遺跡」より)

(d) 西塔跡

位置：金堂基壇南西端から約 5 m 南

規模：基壇平面東西 12 m × 南北 8 m 以上

柱間：3 間 (5.5 m) × 3 間？

時期：8世紀～9世紀前半

調査年次：平成 10(1998) 年

報告書：『宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』

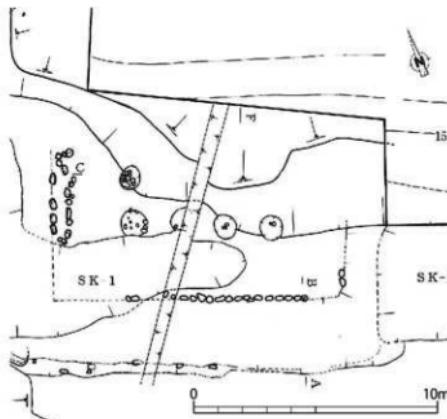


図 2-5-5 弥勒寺 西塔跡 平面図
(S=1/200、「宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ」より)

(e) 鐘樓跡

位置：金堂基壇西端から約 15 m 西
 規模：基壇平面東西 5.5 m 以上 × 南北 12.2 m
 柱間：桁行 3 間 (7.2 m) × 梁行 2 間 (3.6 m)
 時期：8 世紀～14 世紀初頭?
 調査年次：平成 10(1998) 年
 報告書：『宇佐地区遺跡群発掘調査概報 X I』

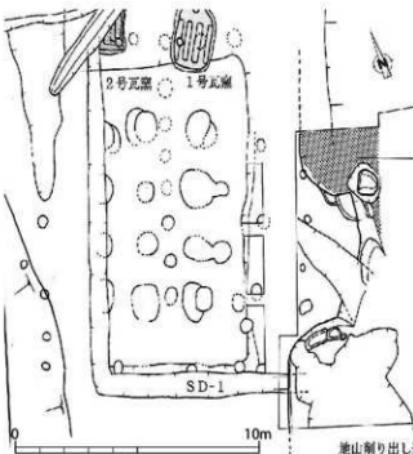


図 2-5-6 弥勒寺 経藏跡 平面図
(S=1/200、『宇佐地区遺跡群発掘調査概報 X I』より)

(f) 1号瓦窯跡

位置：鐘楼基壇北東隅付近
 規模：全長 2.3 m・幅 1.35 m
 時期：鎌倉時代
 調査年次：平成 10(1998) 年
 報告書：『宇佐地区遺跡群発掘調査概報 X I』

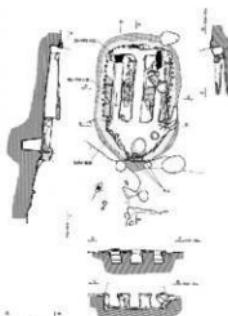


図 2-5-7 弥勒寺 1号瓦窯跡 平面図
(S=1/100、『宇佐地区遺跡群発掘調査概報 X I』より)

(g) 常行堂跡・長僧坊跡

位置：西参道北側
 規模：不明
 柱間：不明
 時期：不明
 調査年次：平成 28(2016) 年、平成 30(2018) 年
 報告書：
 『市内遺跡発掘調査概報 25』
 『市内遺跡発掘調査概報 27』



図 2-5-8 弥勒寺 常行堂・長僧坊跡？ 础石（南から）

(h) 東大門跡、溝跡

東大門跡

位置：西参道東端付近、神宮総合案内所南側

規模：桁行3間(8.2m)、梁行2間(5.2m)

時期：

調査年次：昭和59(1984)年

報告書：『弥勒寺』

備考：礎石4基現存

溝跡(S D 1)

位置：西参道東端付近、放生池北側

規模：幅2m・深さ0.2m

時期：不明

調査年次：平成31(2019)

報告書：『市内遺跡発掘調査概報27』

図2-5-9 弥勒寺 東大門跡 平面図
(S=1/200、『市内遺跡発掘調査概報27』より)

(i) 東門跡

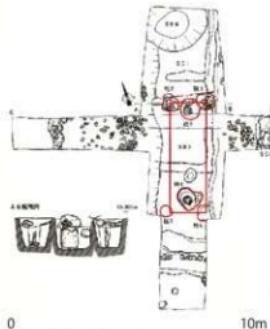
位置：參集殿南東の参道付近

規模：桁行1間(4.5m)×梁行1間(1.5m)

時期：8世紀～9世紀中頃

調査年次：昭和59(1984)年

報告書：『弥勒寺』

図2-5-10 弥勒寺 門跡 平面図
(S=1/200、『弥勒寺』より)

(x) 西大門跡

位置：吳橋西側

規模：平面規模不明。2階建(昭和初期頃)

東大門と同程度の平面規模か

柱間：桁行3間、梁行不明

時期：17世紀前半以降か

備考：昭和の大造営で解体。基壇現存

昭和大造営前の弥勒寺西大門
(左：『宇佐神宮絵葉書』、右：『ふるさと写真集』)

(j) 北大溝跡、北参道路

北大溝跡

位置：参集殿付近
規模：幅 1.6 ~ 2.8 m、深さ 0.8 ~ 0.9 m
時期：8世紀～9世紀中頃
調査年次：昭和 58(1983) 年
備考：寺域の北限区画遺構。
土師器(环)に「弥寺」という刻書有。

北参道路

位置：西参道沿い
規模：幅
時期：
調査年次：昭和 58(1983) 年
備考：
報告書：『弥勒寺』

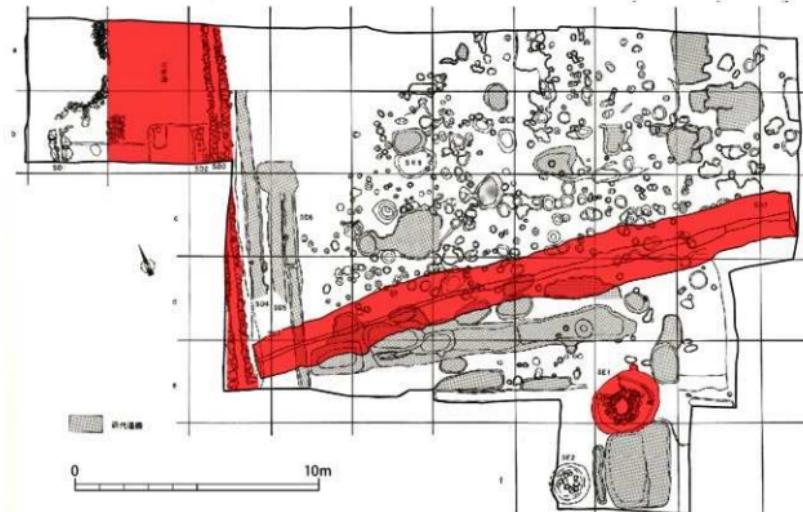


図 2-5-11 弥勒寺 北大溝跡、北参道路 平面図 (S=1/200、『弥勒寺』より)

(k) 井戸跡

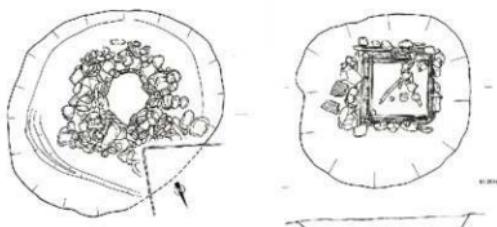
SE-1

位置：北大溝から 3 m 南
規模：直径 3.2 m、深さ 1.7 m
井戸枠：石組
時期：16世紀
調査年次：昭和 58(1983) 年

SE-3

位置：初沢池南東隅付近
規模：直径 3.2 m、深さ 1.7 m
井戸枠：縦板組隅柱横棟留
時期：13世紀

報告書：『弥勒寺』



SE-3

図 2-5-12 弥勒寺 井戸跡 実測図 (S=1/100、『弥勒寺』より)

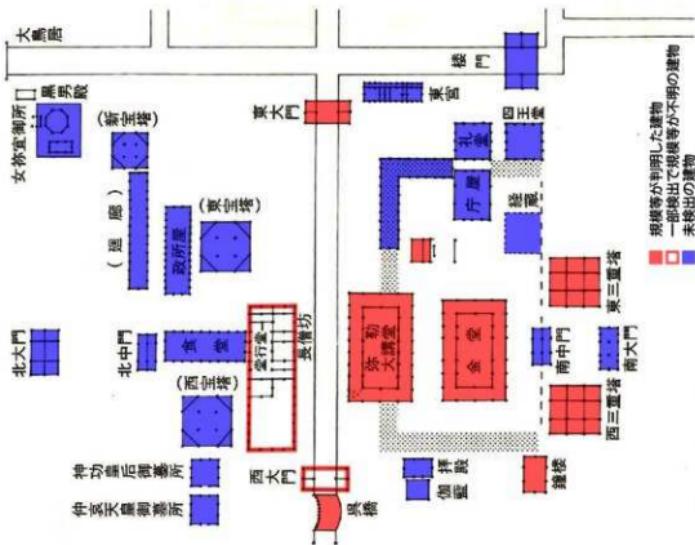


図 2-5-13 右: 古竹跡寺の伽藍配置想定図(「弘劫寺」より一部改変)、左: 接出された遺構との比較(S=1/1500)。右は講堂の行間に合わせて右図を重ね合わせたもの(女将宣制所は除外)



(1) 未検出の建物跡

図2-5-13は応永の古図等から推定した弥勒寺関連遺構の配置である。西参道より北では、部分的な発掘調査は実施されているが、大部分の建物はその一部すら未確認である。

なお、昭和7(1932)年から同17(1942)年まで行われた大造営以前は、西参道周辺は民有地となっていた。そのため、弥勒寺関連遺構以外にも近代の建物跡等が重複しており、遺構の特定には慎重を期す必要がある。神宮庁や勅使斎館といった昭和造営で建てられた建物部分に、東宝塔や政所といった遺構が残されている可能性がある。また、各種の絵図には北大門北側に僧坊が描かれており、寺域の外でも遺構が検出される可能性は高い。

西参道より南の伽藍付近では、八坂神社周辺に經藏や四王堂といった建物が想定される。また、薬師寺式寺院は講堂と中門を結ぶ回廊を有するが、弥勒寺跡では回廊遺構が未確認である。



応永の絵図を基に作成された弥勒寺跡の建物ジオラマ 弥勒寺部分(大分県立歴史博物館蔵)

E 弥勒寺跡以外の地下遺構

保存管理計画策定期点(平成4年)では弥勒寺跡以外の発掘成果の蓄積がなく、詳細は不明であった。近年、発掘調査に基づく弥勒寺跡以外の遺構もわずかながら確認されつつある。

(a) 池内法華三昧堂跡(大式堂跡)

位置: 絵馬堂から約2m東

規模:

- ・基壇平面 東西約13.5m・南北約10m

- ・柱間 3間(7.2m)×3間(7.2m)か

時期: 18世紀後半~19世紀初頭、

(下位に11世紀頃の基壇残存か)

調査年次: 平成25(2013)年

報告書:『市内遺跡発掘調査概報22』

備考:保護盛土で現地保存



池内法華三昧堂跡 遺構検出状況(南から)

(b) 未確認の建物跡(表2-5-3)

応永の古図をはじめとする各種の絵図には、弥勒寺や小桜山周辺以外の建造物も多数描かれる。上宮周辺にあった護摩堂や経蔵、菱形池西側の三重塔や五重塔等の遺構は未確認であり、史跡内の整備等を行う際に注意が必要である。

表2-5-3 絵図に登場する主な未確認の建物(弥勒寺境内地以外)

建物名称	位置	応永年間 宇佐宮指図	寛永5(1628) 宇佐宮絵図	寛保2(1742) 宇佐宮絵図	安政4(1857) 宇佐宮本版社頭図
護摩堂	上宮北西隅	○	○	○	○
神輿庫	上宮北西隅	○	○	○	○
経蔵	上宮南西隅	○	○	○	○? (宝庫)
楼門	正参道南	○	○	×	×
三重塔	菱形池南西側	○	○	×	×
五重塔	菱形池北西側	○	○	×	×
大塔	菱形池北側 宮司職舍付近?	○	○	×	×
頓宮(上宮)	現頓宮付近	○	○	○(敷地のみ)	○(敷地のみ)
頓宮(下宮)	菱形池	○	○	○(敷地のみ)	○(敷地のみ)



応永期の境内ジオラマ 上宮付近
(大分県立歴史博物館蔵)



応永期の境内ジオラマ 菱形池西側
(大分県立歴史博物館蔵)



応永期の境内ジオラマ 菱形池北側
(大分県立歴史博物館蔵)

F 昭和の大造営

第2次世界大戦前の日本では、国威発揚のために全国の神社で社殿の修理等の大造営が実施された。宇佐神宮では昭和7(1932)年から同16(1941)年にかけて、本殿をはじめとする建造物の修復・改築・移設・新築や、菱形池の拡大・祓所や放生池の新設・弥勒寺跡北側にあった神明町の撤去・大尾山参道の新設等の境内地の整備が行われた。

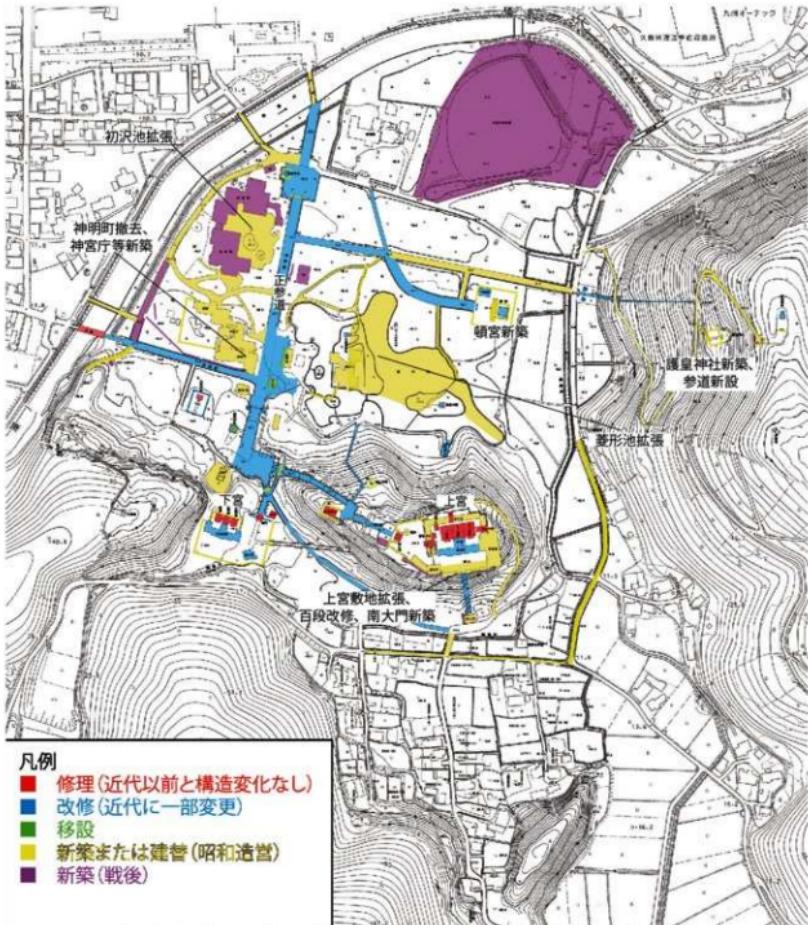
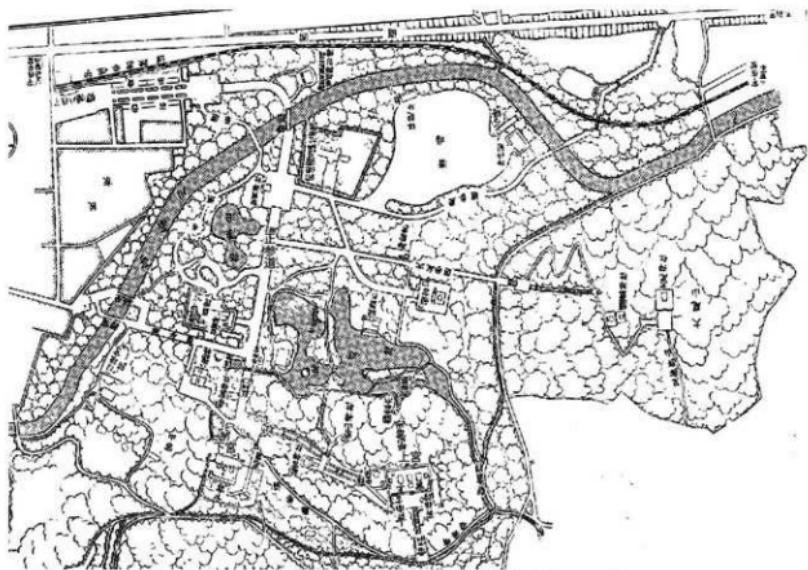


図 2-5-14 昭和の大造営工事箇所と戦後に建設された主な建造物位置図 (S=1/5,000)



昭和の大造営以前の宇佐神宮境内(縮尺任意、宇佐神宮所蔵図からトレース)



昭和の大造営直後の宇佐神宮境内(『宇佐神宮昭和御造営』より)



昭和の大造宮中の宇佐神宮境内（昭和 9 年撮影 上が北、宇佐神宮所蔵）



昭和の大造宮後の宇佐神宮（昭和 22 年撮影 上が北）

昭和の大造営前と現在の宇佐神宮境内 1

正参道
大鳥居

昭和の大造営以前



現在



西参道



上宮への参道
鳥居



上宮
西大門



昭和の大造営前と現在の宇佐神宮境内2

昭和の大造営以前

南中樓門・回廊



現在



上宮西中門



下宮本殿



春宮神社
(社殿は下宮北側から現在地に移設)



G 御許山地区

(a) 大元神社、大元八坂神社

御許山は古くは馬城峰と呼ばれており、9世紀中頃に靈山寺が山頂に創立された。山頂にある3つの巨石の前に講堂と鐘楼、講堂の対面には祇園社(現、大元八坂神社)が建てられた。

講堂と鐘楼は失われており、講堂があった場所に大元神社拝殿が建つ。大元神社南には御靈水があり、社殿周辺には石灯籠等がある。



大元神社 拝殿

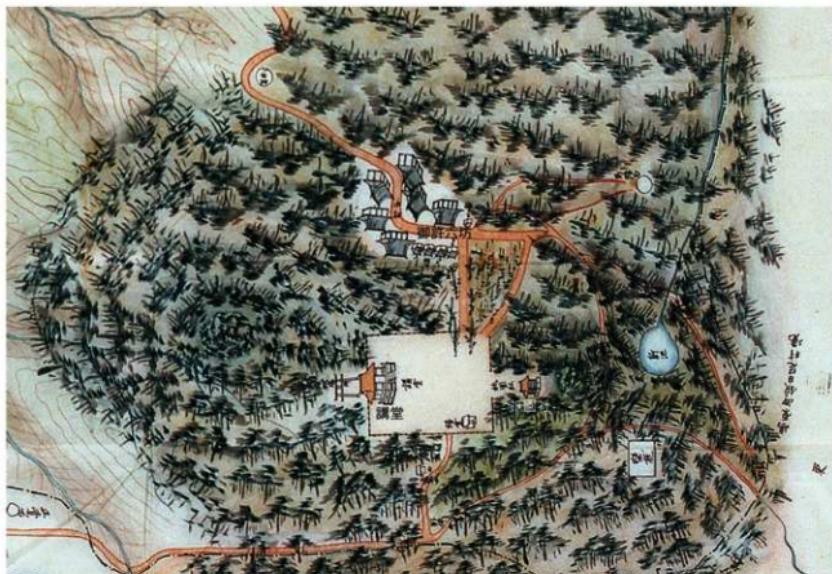


大元八坂神社 本殿



宇佐神宮と御許山(北西から)

絵図等による記載（御許山地区）



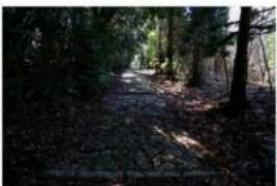
天保4(1833)年 御許山絵図 大元神社・六坊付近(県有文、宇佐神宮所蔵、上が北)



元治元(1864)年 養虫山人絵日記(上) 御許山図(個人蔵、写真提供: 大分県立歴史博物館)



御靈水



大元神社 石畠



御許山 正参道

(b) 六坊跡

宇佐神宮から御許山へ続く御許山正参道(御許古道)沿いに発展した僧坊跡で、現在でも石垣等が残る。

石垣坊・西ノ坊・成就坊・相洞院・東ノ坊・谷ノ坊の6つの僧坊が近世末まで存続していたが、慶応4(1868)年に起きた御許山騒動による焼き討ちで建物等は焼失した。

六坊跡の発掘調査等は行われていないが、各僧坊には石垣の他にも基壇縁石や礎石、池跡等が比較的良好な状態で遺存する。

本項Cで示した「小倉県管内第91区宇佐郡日足村耕地山林図」から、参道を登ってきた時の左側(東側から北側)に成就坊跡・相洞院跡・東ノ坊跡の順に並んでいたと推測できる(乙咩2000)。また、「蓑虫山人絵日記」では東ノ坊跡の東側に不動堂跡・南側には大師堂や釈迦堂・経蔵等が描かれる。

本計画策定にあたり作成した赤色立体図により、御許山六坊跡付近の平坦面を検出できた。上記の成果を地形図に当てはめると、図2-5-15のようにそれぞれの坊跡を推測できる。



小倉県管内第91区宇佐郡日足村耕地山林図(拡大)
(個人蔵 上が北)

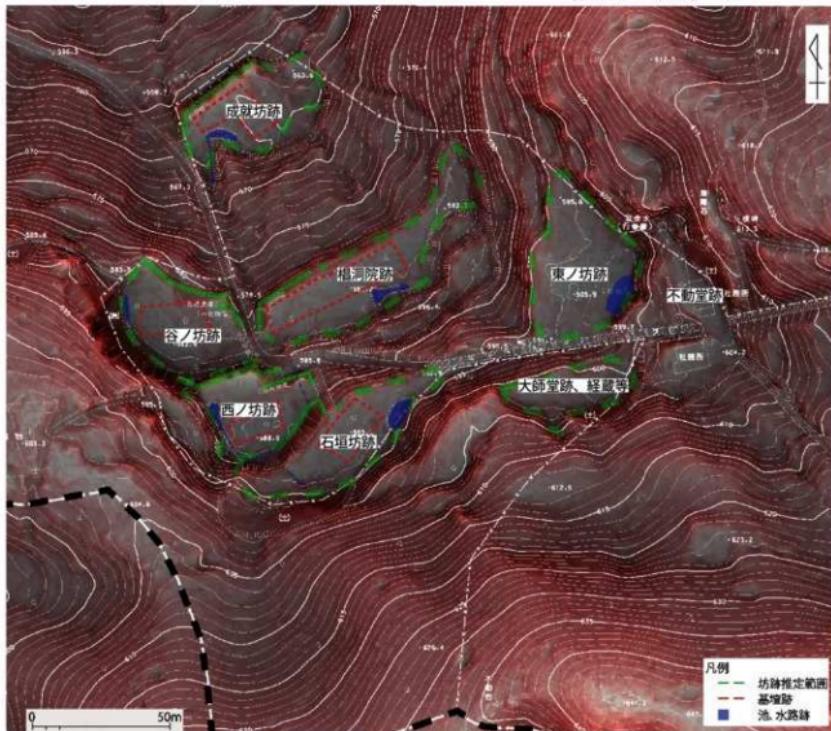


図2-5-15 御許山 六坊跡 坊跡範囲等推定図 (S=1/1,500)

石垣坊跡

位置：御許山参道石段下から西に約 80 m
 遺構：石垣、石段、基壇縁石、礎石、池
 時期：中世～近世？
 備考：

- ・石段の一部崩壊

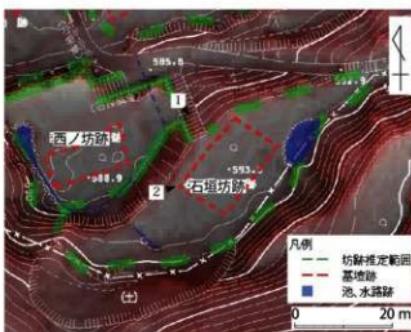


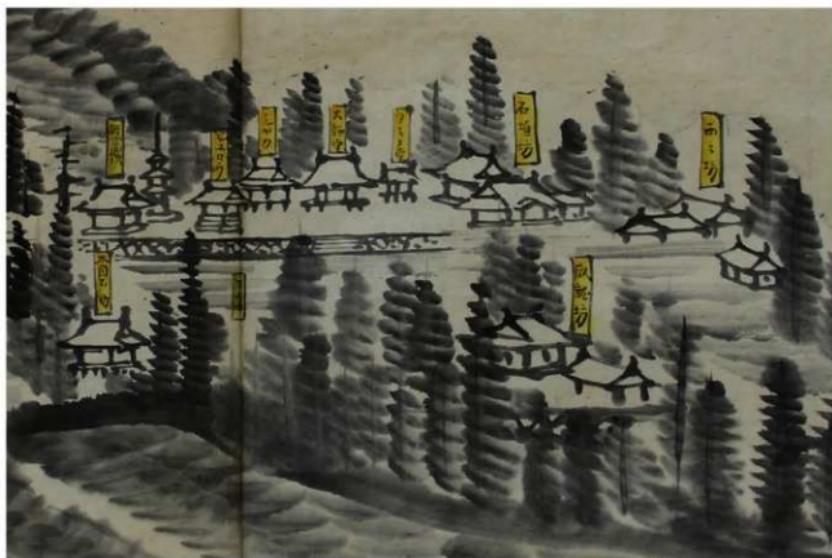
図 2-5-16 石垣坊跡 規範等推定 (S=1/1,000)



1 石垣坊跡 石段 北から



2 石垣坊跡 基壇縁石？



蓑虫山人絵日記 御許山図（個人蔵）六坊部分拡大 橋洞院・東ノ坊・谷ノ坊は描かれていない

西ノ坊跡

位置：石垣坊の北側斜面下

遺構：石垣、石段、基壇、礎石、水路（暗渠）、池、井戸？

時期：中世～近世？

備考：

- ・石垣、石段に崩落あり
 - ・北側石垣の西端は谷ノ坊跡の石切場と接続
 - ・礎石に被熱痕あり。
- 御許山騒動（明治元年）によるものか。

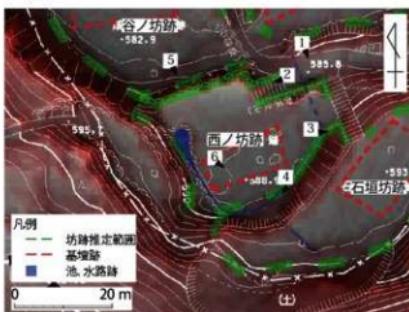


図 2-5-17 西ノ坊跡 範囲等推定図 (S=1/1,000)



1 西ノ坊跡 正面石垣（北から）



2 西ノ坊跡 階段 崩落あり（西から）



3 西ノ坊跡 南石垣・水路 石垣が一部崩壊（西から）



4 西ノ坊跡 南石垣 井戸？（東から）



5 西ノ坊跡 西石垣・水路 石垣が一部崩壊（北から）



6 西ノ坊跡 被熱痕のある礎石

谷ノ坊跡

位置：西ノ坊北側石垣の下

遺構：石垣、石段、基壇、礎石、池、石切り場

時期：中世～近世？

備考：

- ・石垣に崩落あり。

- ・基壇付近に中世～近世の遺物多数散布

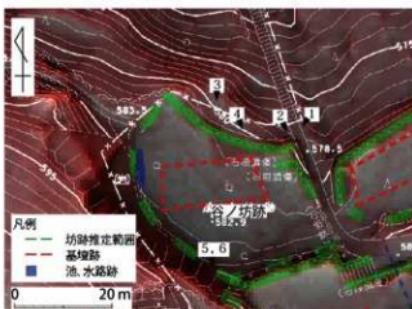


図 2-5-18 谷ノ坊跡 範囲等推定図 (S=1/1,000)



1 谷ノ坊跡 石垣北東端（北東から） 左右は崩落



2 谷ノ坊跡 石垣北東端付近（北から）



3 谷ノ坊跡 石垣北西側（北から）



4 谷ノ坊跡 基壇縁石（北から）



5 谷ノ坊跡西側 石切場跡（北から）



6 谷ノ坊跡西側 石切場矢穴跡（北から）

東ノ坊跡

位置：大師堂跡の北側

遺構：礎石、池

時期：中世～近世？

備考：

- ・広い平坦面と礎石列あり。

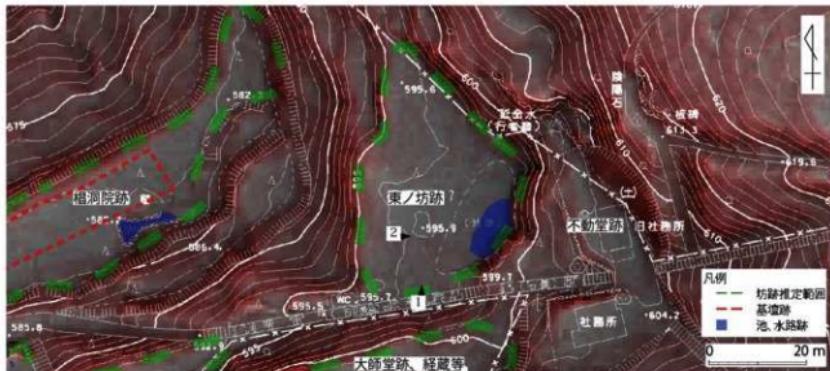


図 2-5-19 東ノ坊跡 観測等推定図 (S=1/1,000)



1 東ノ坊跡(南から) 平坦面が広がる



2 東ノ坊跡 石垣跡(西から)



天保 4(1833)年 御許山絵図 六坊付近 (上が北)

根洞院跡

位置：参道を挟んで谷ノ坊跡の東側

遺構：石垣、基壇縁石、礎石、池

時期：中世～近世？

備考：

- ・石垣は比較的良好に残存

- ・基壇縁石から30m程東にさらに平坦面あり。



図 2-5-20 根洞院跡 範囲等推定図 (5=1/1,000)



1 根洞院跡 石垣北東端(北西から)



2 根洞院跡 石垣西側(西から)



3 根洞院跡 池跡(南から)



4 根洞院跡 基壇縁石(東から)

成就坊跡

位置：樋洞院跡から北へ約 75 m
 遺構：石垣、基壇縁石、礎石、池
 時期：中世～近世？
 備考：
 　・石垣西端部崩落

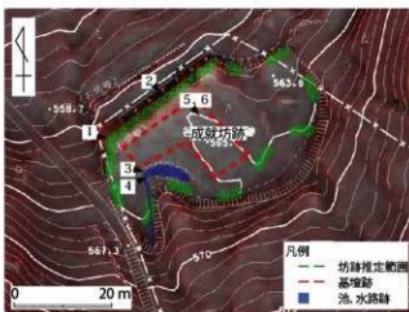


図 2-5-21 谷／坊跡 基壇範囲等推定 (S=1/1,000)



1 成就坊跡 石垣北西端(西から) 端部は崩落



2 成就坊跡 石垣北面(北から)



3 成就坊跡 池跡(西から)



4 成就坊跡 池跡 橋(東から)



5 成就坊跡 礎石列



6 成就坊跡 礎石

(c) 参道(御許古道)、石段、石畳

天保4(1833)年に描かれた絵図には、現存する参道も描かれている。基本的な参道の配置は変化していない可能性が高い。

(d) 石造物

大元神社周辺や史跡境界北東側付近には多くの石造物がある。大部分は近世の所産と思われ、一部の仏像は明治時代の魔仏毀釈で頭部が破壊されている。

(e) 御許山のアカガシ林

山頂付近の平坦地に発達したアカガシ林で、アカガシ・ミヤマシキミ群集の典型的林分。宇佐神宮社叢と同様、鎮守の森として守られたことにより、宇佐地域における標高500～600m程の山地に発達した潜在的植生が残る。



天保4(1833)年 御許山絵図(県有文) 参道付近(上が北)



御許山 参道付近現況図(S=1/2,500)



陰陽石周辺の石造物



陰陽石周辺の板碑



龍の駒(史跡北東側境界付近)



首なし地蔵(史跡北西側境界付近)